

エッセイ「手術室看護師とのエピソード」(一般の部)

最優秀賞受賞作

神様からの贈り物

齋藤 寿子

「なぜ私が?」「神様、何か悪いことをしましたか?」30代前半で子宮体癌と言われ、頭が真っ白になった。

子宮は女性の体にとって象徴である。それを失う『喪失感』は言葉では言い表せない。しかも、私は未婚で子供もいないのに。それからは『癌』『死』『手術』『喪失』『不安』の文字ばかりが脳裏をよぎった。

手術前日、不安のまま麻酔科外来を受診した。診察を終えると男性看護師が「ご不明な点はありませんでしたか?」と声をかけてきた。私はその看護師へ不安の全てを吐き出すと、目線を合わせ静かに頷きながら話を聞いてくれた。看護師は「辛いですね。私達の仕事は“生きる人”の背中を押すこと。Aさんの背中を私達が押しますから生きてください」と言った。

『喪失感』は生きていればこそ。『生きる』という言葉に心が軽くなり自然と涙が溢れた。

私は看護師の手を握り、担当になって欲しいとお願いをした。今にして思えば男性を指名するなんてホストクラブか何かと勘違いしてないか?と自分に“ツッコミ”をいれたくなる(笑)。看護師は苦笑いし担当を引き受けてくれた。手術当日、手術台に横になり『とうとう子宮を失う』と思い涙を流すと、そっと涙を拭きとり無言で手を握り擦ってくれた。その大きく暖かい手に安心感を憶え眠った。

次に目を覚ますと手が暖かい。「生きてくれて、ありがとう」と優しい声がしたのを憶えている。『喪失感』はなく、不思議と心地よかった。翌日には病室まで来て眩暈や嘔気、術後疼痛などがないか心配してくれた。手術前日の麻酔科外来から『生きる』ということの色濃く体験した3日間だった。

人が生きるためには多くの人の支えがあり、その支えに応えるためにも生きなければならない。そんなことを教わったような気がする。

後日談。退院前に男性看護師へ交際を申し込み見事ゴールイン。夫婦2人、幸せに暮らしている。癌は『神様からの贈り物』だった。

(講評)

若くしてがんと診断された筆者が、子宮を失うという喪失感と向き合いながら、手術室看護師のさりげない声掛けや関わりを通して、“生きる希望”を見出していく過程が丁寧に描かれていました。そのひと言が、患者の心を動かす力になることを静かに伝えてくれます。看護が“命”だけでなく“心”をつなぐ営みであることを示す、力強くも優しい作品です。

エッセイ「手術室看護師とのエピソード」(一般の部)

優秀賞受賞作

扉の向こうの優しさ

外間 祥子

手術室の前で名前を呼ばれたとき、私は思わず息を飲んだ。夫の大きな手を握りしめたまま、どうかこのまま時間が止まればと願った。手術を受けるのは私の父だった。年齢もあってリスクが高いと医師から説明を受けていた。頭では理解していても、感情が追いつかない。そんな私に、スクラブをまとったひとりの看護師さんが声をかけてくれた。

「大丈夫ですよ。お父さまのそばには、私たちがついていきますから」

その言葉に、私は初めて涙をこぼした。優しさに触れて、張りつめていたものがほどけたのだろう。手術室の扉の向こうは、どこか異世界のように感じていた。でもその手術室看護師さんの言葉で、扉の奥にも温かい人の手があると知った。

手術が始まる直前、再び彼女が戻ってきて、「お母さま、眠る前にご家族のことを話してくださいましたよ」と教えてくれた。父は不安の中でも私たち家族のことを想ってくれていた。そんな父の心に寄り添い、わざわざそれを伝えてくれた看護師さんの心遣いが、どれほど救いだったか言葉にならない。

数時間後、無事に手術が終わり、術後の説明を受けたときも、彼女はそっと私のそばにいてくれた。「よく頑張られましたね」と私にまで労いの言葉をかけてくれた。患者本人だけでなく、家族にとっても、手術は試練だと理解してくれていることが、何より嬉しかった。

手術室看護師さんに望むことがあるとすれば、どうか今後も「患者の家族」にも心に向けてほしいということ。手術という大きな壁に立ち向かうとき、私たち家族もまた、誰かの一言やまなざしに救われる存在だから。

手術室という特別な場所で、患者の命を預かる責任は計り知れない。それでも、あのとき見せてくれた笑顔と優しさが、今も心に残っている。あの手術室看護師さんのような存在がいる限り、きっと多くの家族が、少しだけ勇気を持てるのだと思う。

(講評)

患者だけでなく、その家族の心情にも寄り添う手術室看護師の姿が印象的に描かれた作品です。手術直前の緊張や家族の不安、そして看護師の温かい言葉やまなざしがもたらす「救い」が、細やかな描写で心に響きます。特に、患者である父の思いを家族へ伝えた場面は、看護が“命”だけでなく“心”をつなぐ営みであることを教えてくれます。手術が家族にとっても試練であることを丁寧に伝える、あたたかいエッセイです。

エッセイ「手術室看護師とのエピソード」(一般の部)

優秀賞受賞作

不安や緊張を消してくれた暖かい手の術

伊藤 利江

家の中で転んだ。思いっきり尻もちをついた。お尻を撫でながら立ち上がり、はぁ…やれやれと歩き出す。普通に歩けるし痛みもそれほど無い。

翌朝フレトレに行き、念のためバイクも負荷をかけず上半身のトレーニングを重点的に行い、すがすがしい気持ちで歩いて帰宅。ところが…翌朝急激な痛み。立ち上がれず歩くことも出来ず。レントゲンに続き MRI も。結果、大腿骨にヒビが入っている。年齢的に入院、手術（人工関節）が必要と。まさかまさかの展開に気持ちがついていかず。尻もちついただけなのに…。

着々と手術の日が近づき前日に入院。翌日の手術の説明を丁寧に受ける。手術するのは初めてではないけど緊張する。朝 8 時半からと聞き、覚悟を決めて睡眠。翌朝、11 時から変更になったと看護師さんに伝えられる。昨日の覚悟が先延ばしになり、だんだん心細く不安な気持ちに。時間過ぎてもお迎えが来ず、前の人が長引いているのか、結局 13 時からとなった。「もうこれ以上遅れないで！」と心の中で叫ぶ。早くから手術着に着替えているのに…。看護師さん謝ってばかりで気の毒。何度も様子を見に来てくれたオペ看さんが、手術以外の話をして気を紛らわしてくれる。ようやく私の番。オペ室の前にドクターが待っていてくれた。中に入ると思ったより狭く、ドクター3人オペ看さんが2人の5人で1チームなのか。丁寧に確認してる会話が聞こえる。オペ看さんが手を握ってくれた。人の手ってこんなにも暖かく心が落ち着くものなのか。さっきまでの緊張がほどけ不安が消えてくる。いよいよ始まる時には「これから〇〇さんの〇〇置換手術を行います」ときちんと挨拶をしてくれて更に安心感。麻酔の先生が大きなマスクをつけたと思ったら眠りに落ちていた。

目が覚めると病室。ああ、無事に手術が終わったのか。寝ている間に終わってしまったが、その間、あのオペ室のチームの方々のおかげでこんなにすっきり目覚めることができたのだ。暖かい手の感触はしっかり覚えてる。あの手の術で治してもらったのだ。

(講評)

看護師がそっと握った手のぬくもりが、不安に包まれていた筆者の心を静かにほぐしていくその瞬間が強く印象に残る作品です。急な入院と手術、繰り返される待機の中で、看護師のさりげない関わりが安心へと変わっていく様子が、術前から術後まで丁寧に綴られています。